

季刊 史料と伊能図

伊能忠敬

研究

一九九八年秋季 第十七号



伊能忠敬研究会

表紙図解説 伊能忠敬記念館蔵 文化元年沿海地図大図 初図

伊能忠敬は、第四次までの測量をおわって、東日本全体の地図を幕府に提出した。「日本東半部沿海地図」とか「日本東三十三カ国沿海地図」といわれる図である。長い名称なので略して沿海地図といっている。大図六九枚、中図三枚、小図一枚からなっており、江戸城大広間で全図を接続して将軍・徳川家斉の上覧に供された。

本図の成功により、伊能測量の評価が確定し、忠敬は幕府役人に登用され、西国筋の測量では槍を立て、多数の下役と内弟子を引き連れることになる。この図は諸侯の間で評判になったらしく、なかでも小図は手頃なので頒布希望が多かった。伊能図のなかでは最も多くの写本・副本が残っている。

本図は大図の初図で江戸湾岸と北に向かう街道が描かれている。図ではよく見えないが、測線は深川の黒江町を出発し、中川の御番所をとおってから千葉の沿岸に伸びている。測線の傍らの沿道風景は絵画的に描かれ、何某知行所と領主名が記されている。大図六九枚と、中図三枚の副本は伊能忠敬記念館に現存する。今後、「伊能図探求欄」で逐次紹介の予定である。

(題字は忠敬の筆跡)

(渡辺)

目次

(表紙写真解説) 目次

巻頭エッセイ

伊能 敬君のこと

トピックス 1

一九九八年度伊能忠敬研究会総会報告

「柴山日記」報道まで

地域史料

第四次測量における加賀藩測量の実態

先触れ二題

トピックス 2

ニッポンを歩こう 伊能本部隊員選考会

史料紹介

伊能家文書紹介 十

●桑原隆朝(つづき)

●山川湊の風

エッセイ

忠敬さんは歩測がお嫌い二

投書

女めあかし様

伊能図探求 十五

文化元年上呈 伊能大図

ニュース速報・編集後記

(裏表紙) 英文目次

小倉 芳彦 1

中村 忠弥 2

堀田 希一 4

河崎 倫代 6

渡辺 一郎 11

佐藤 嘉尚 13

安藤由紀子 14

伊能 陽子 19

永野 達代 24

大内 繁男 28

渡辺 一郎 32

33

伊能 敬君のこと

永年つきあって来た同級の友人に先立たれた者の寂寥は、何によって埋め合わせできるのか。伊能 敬が一九九五年四月七日に没してはや三年の月日がたつ。

伊能を含むわれわれの学年は、昭和十四年（一九三九年）の四月に旧制武蔵高等学校尋常科に入学した。入学した日から「君たちをジュントルマンとして遇する」と言われたわりには、二年生まで半ズボンをはかされて、いささか冴えぬ姿の少年紳士だった。

「支那事変」と称する中国への侵略戦争は泥沼化し、国際的な経済封鎖網で日本は日々息苦しさを増していた。昭和十六年十二月八日、「帝国陸海軍ハ西太平洋ニ於テ米英両国ト戦闘状態ニ入レリ」というラジオ放送は、そうしたモヤモヤを吹き飛ばす「快拳」と受け取られた。寒気の張りつめた校庭を歩きながら、伊能と私は「これは勝てる！」と低声で語り合った記憶がある。この開放感はわれわれだけの錯覚ではなかったはずだ。

伊能が忠敬から七代目に当たることを知ったのがいつだったか覚えはない。身体は小柄だが、文武両道の達人で、左利きを生かして剣道では二万流を使い、相手を悩ませた。テニスも相当の腕だったと聞く。音楽の才に恵まれ、自ら唱うとともに各方面のコーラスの指揮で活躍した。ペン画の写生も特技で、毎年の年賀状の版画は念入りの逸品だった。

われわれは文科と理科に道を分かち、大学では伊能は化学を、私は東洋史を専攻した。昭和二〇年八月十五日の「終戦」の玉音放送を、伊能も私も東大安田講堂のラジオで聞いている。そのことをかなり後になるまでお互いに知らなかった。

卒業後、伊能は母校武蔵高校に勤務し、フルブライト奨学金

小倉 芳彦

でアメリカに留学、帰国して武蔵大学の専任教員となった。画才を生かした緻密な教材作りは、兼務した放送大学でも好評だったと聞く。剣道部の部長をむろん勤め、学生部長、人文学部長などの要職を歴任した。武蔵と成蹊、成城、学習院の四大学間では運動競技大会などを通じて交流があるので、会合の席で一緒のこともあったはずである。

武蔵のクラス会準備のためと称して、伊能や私を含む十人ばかりが時々集まっては雑談する会を続け、それを「未央会」と名づけてから、はや十数年になる。その仲間で一九八五年に中国旅行を計画した。開放政策が始まりかけた頃のこと、一行は毎日のトラブル続きで、西安郊外では豪雨の中でマイクロバスが何度も立ち往生した。バスのステップを降りて雨の車外に出ようとすると、ふっと傘をさしかけてくれる人がある。先に降り立った伊能だった。さりげなく身についたそのマナーの優しさに私は深く打たれた。

一九九〇年の夏、検査で病気が見つかり、入院して手術を受けたが、翌年二月の未央会の伊豆・富士山旅行には病後の身で参加してくれなかった。温泉の浴槽では手術の縫合の傷痕を示して、「まるでジッパーだよ」と苦笑い。翌日には三島に出て名物の鰻を食べてから駅に向かったのだが、その時の足取りの重さにわれわれは心を痛めた。

それからの伊能は入院を繰り返して、未央会への出席も間遠になったが、剛毅を内に潜めたそのにこやかさは遂に失われなかった。病魔がなぜ伊能の身体を狙い打ちしたか、私は今もって納得できぬ気持ちでいる。

（おぐら よしひこ・学習院大学学長）

一九九八年度伊能忠敬研究会総会報告

去る平成十年九月十二日の十一時、佐原市中央公民館大会議室において一九九八年度伊能忠敬研究会の年次総会が開催されました。

当日は、「地図のまち・佐原、伊能ウオーク出立記念式典」の日でもあります。総会はこの式典に先立って午前十一時、芳賀理事の開会宣言、そして議長団に大宮信篤（香取神宮権宮司）、神保誠（中敬の父・神保貞恒家の当主）の両氏が選出されて議事が始められました。曇り空ながら、九州など遠方からの会員も含め当日出席者は五〇名委任状七六名計一二六名と報告され、総会は過半数をもって成立しました。議案は原案通りすべて拍手をもって満場一致で承認され十一時三〇分議事は無事終了しました。尚、当日発表された会員総数は二〇三名です。

議事の内容は次のとおりです。

第一号議案・・・活動経過報告

（渡辺事務局長）

第二号議案・・・九七年度までの決算報告

（渡辺事務局長）

第三号議案・・・会則の制定

（清水理事）

第四号議案・・・役員の選任

（清水理事）

第五号議案・・・九八および九九年度活動方針と九八年度予算

（渡辺事務局長）

以上の議事終了後、新役員を代表して小島理事の挨拶があって、総会を終わりました。

次に来賓祝辞。

この日の来賓の方々のご祝辞を紹介します。

まず、佐原市・鈴木全一市長「三年前、フランスのイヴ・ペイレ氏所有の伊能中図が伊能忠敬研究会の方々の尽力で佐原市ではじめて展示された。これがきっかけで忠敬の業績が見直されている。

佐原市は忠敬ゆかりの地であり、いまさらながら佐原市の誇りに思う。今後は佐原市を発信基地にして、中敬全国ネットを展開していきたい。このことが、人の和・知識の輪につながると思う。」

続いて国土地理院・野々村邦夫院長「二八〇〇年、最初の忠敬測量隊は僅か六名だった。それに比べ伊能忠敬研究会はその何十倍のメンバーだ。心強い限りである。忠敬には学ぶところは多いが、むしろ感動させられる場面で影響が大きい。先日、米国の地理局長が来日したとき、忠敬記念館を案内した。また、日本の青少年の地図に対する関心をもっと高めてもらいう意味で「ふるさと発見―手作り地図コンテスト」（仮称）みたいなものを考えている。」

また、日本歩け歩け協会・江橋慎四郎会長「日本縦断プロジェクトのきっかけは忠敬研究会の研究成果による。先日の東京江戸博での歩



測大会では、たくさんの歩測名人・達人が出た。来年一月二五日から忠敬ルートをスタートするが、これを契機に新しい人生再発見の場面を作りたい。二〇〇一年にイベントを成功させたい。」

締め括りとして朝日新聞社・中江利忠相談役(前社長)「来年一月二五日は朝日新聞創刊一二〇周年にあたる。伊能忠敬にあやかってこれを祝いたい。私も千葉県人である。五七年前、香取神宮で剣道の奉納試合があり、少年剣士として優勝した。一卵性双生児の兄弟に利孝がいる。忠孝「タダタカ」兄弟といわれた。忠敬に縁があると思う。」

このあと、渡辺代表理事より、原田関西支部長および石川九州支部長の紹介があり、総会行事はすべて滞りなく、かつ盛大な裡に終了しました。

なお、本報告をもって総会決議通知に代えさせていただきます。会則の表現の修正について、一部貴重なご意見をいただいておりますが、今後、修正の機会に生かしていきたいと考えております。

また、総会の席上で、会員の陽光会会長・伊能静光氏の揮毫による伊能研究会の幟が披露され、静光氏から御挨拶があった。

総会のあと、午後は千葉県知事、伊能ウオーク名誉隊長・加藤剛氏等が出席して伊能ウオーク用御用旗授与など記念式典とパネル討論があり、全員参加した。

さらに、記念式典の後、一八時より席を移して、「よくらや」の大米蔵のなかで懇親会があり交流を深めることができた。

(総務会計幹事 中村忠弥記)



御用旗を手に 加藤剛名誉隊長

「柴山日記」報道まで

堀田 希一

第六次測量隊員・柴山伝左衛門正弼の日記が、神奈川県小田原市の古書店にあった。面白い部分を紹介する形で、十月十三日付夕刊の記事にした。

反響は多かった。五〇代の測量士という読者は即日電話で、「反物を二、三週ごとに二、三反ずつ買った」理由を、隊員のふんどしにしたのだろうか？と教えてくれた。他にも数本、好意的な電話をいただいた。口うるさい記者仲間も好意的だった。

こう評判がよいと心苦しい。

実はあの話、伊能忠敬研究会女性メンバーからのプレゼント。出所は伊能陽子さん、実地検分してくださったのは安藤由紀子さん、筆跡を比較してくださったのは浅井京子さんのお三方。紙面では安藤さんしか紹介できなかったが、お三方のご協力やアドバイスがなければまとまらなかった。お礼申し上げます。ありがとうございます。

小生は三様の解釈や分析を聞いては、行けると思ったり、がっかりしたり。まるでエレベーターに乗っている気分でした。上げたり下げたりが、読者に伝わったのです。

三五〇万円?!

伊能さんは、取材のきっかけを与えてくださった。親戚の藤岡さん（研究会会員）の親しくしていた古書店で売りに出しているという話で、「本物かどうかは知りませんよ」

書き方次第で面白い記事になると予感させるお話だった。すぐに古書店に電話して、見せてほしいとお願いした。

行くと、店先になく、奥の方からだしてきた。二冊で三五〇万円の値札が付いていた。

驚いた。しかし、古書店主の高野肇さんは「売れます」と自信ありげだった。聞けば、東京・神田の古書市で仕入れて読み込み、値踏み三年近くかけたという。

面白いと思った。人口二〇万余の小田原で古書店を経営するには、地方史関係の書籍や古文書など、特色のある品ぞろえが欠かせないことは素人にも理解できた。

毛筆書きの読み下しは門前の小僧で、と卑下して見せた高野さんだが、じっくり読み込み、おそらくは専門家の意見も聞いている。日記はともかく、古書店主には本物の感触があった。

どうやって分析し、記事にするか。鑑定を含めた実地検分は、専門知識を持った方をお願いするしかない。で、安藤さんに電話した。

「小田原まで、デイトしていただけませんか？」

気安く言うてから、安手のドラマみたいな話し方を後悔した。ところが、さすがは安藤さんで吹き出しながら、「私でよろしければ……」

返事が粹だ。江戸っ子はこうでなくっちゃ。

改めて、「日記」を見ていただきたいとお願いした。

折悪しく、お忙しい時期だった。それでも時間をさいて、小田原まで二度も足を運んでくださった。一度目は公式記録「測量日記」のコープの四国部分をそっくり持ち、二度目は比較のため柴山の四国での行動記録を抜き書きしての訪問だった。

一度目で八、九割は柴山の日記に間違いないと判断され、二度目は正確な内容だと断定された。お陰で、いかに面白く記事にするかに専

念できた。

鑑定団大活躍

それにしても奇妙な日記だ。

形は江戸時代中期以降、流行した懐中日記スタイル。ほとんど定番の半紙を四つ折りした表側に毛筆で書いたものだが、書き手が一人とは思えない筆跡の乱れがあった。しかも、虫食い穴を最新技法で補修したせいか、半紙がやたら厚かった。

見た直後は、安藤さんも小生も「売値が高い」と言った。もともと買うつもりがないにしては失礼な話だが、なんてバブリーな値踏みだと思ったのだ。

以後は、断片的に印象を伝え合った。

「本物にしては奇妙」

「でも、こんな偽書をつくるのは割が合わない」

「何で、途中で筆跡が違うのか」

二人とも、売り物だと知りながら遠慮がなかった。堂々巡りみたいなチェックを繰り返しているうちに、どうやら柴山伝佐衛門正弼の日記らしいと安藤さんが読みとった。しかし決め手がない。安藤さんも柴山を調べた記憶がないということだった。

どうしようかと、安藤さんに名案が浮かんだ。「伊能さんのところに、柴山の手紙があるから比較したら？」

写真を撮って現像し、送っていただいた柴山の手紙とともに浅井京子さんに見ていただくと、「これ、明らかに違いますよ」

懸念してはいたが、がっかり。気の毒に思ったのか、浅井さんはこう言った。「でも、偽書をつくるメリットはない。伊能測量隊の隊員日記なんてマイナーなんだから、絶対ない。浄書本だと思う」

何のために浄書を？

「伊能忠敬さんは字が上手な方じゃないでしょ？ これは草書まで崩れてはいませんが、行書と言っている。読みやすいよう書き改めたんじゃないかしら」

なるほど柴山伝佐衛門正弼は達筆である。世田谷伊能家にある妙薫宛の手紙は、素人目にも見事な手だ。

日記は、筆運びがおぼつかない感じの二、三人の手だ。安藤さんは女性の手とおぼしき字まであると言う。「測量日記」をまとめるための浄書ならば、納得できる。

悩んでいるところへ安藤さんが、二度目の小田原訪問の成果を伝えてくださった。「照合したところ、行動は全部合っていました。間違いない柴山の日記です」

浄書説を伝えると、「ええ、あり得ると思います。それでいいのではないのでしょうか」

記事にすることにして、渡辺一郎代表理事にコメントをもらった。

「安藤さんに責任を負わせるのが気の毒なら、ボクの発言にしているですよ」

記事は紙面を飾った。柴山がどんな人物だったのか。なぜ、シーボルト事件で処罰されなかったのか等々、調べたかったが手の回らない出来事は積み残した。が、とりあえず一件落着である。

この不況下にあの日記が本当に売れるのかどうか、気にはなる。安藤さんは、「だれかが買ったから見せてもらい、詳しく調べたい」と意欲を燃やしておられる。しかし、高野古書店が簡単に値下げしないとしたら、記事のせいでもある。

(ほった きいち・朝日新聞記者)

第四次測量における加賀藩測量の実態

河崎 倫代

一 第四次測量は一大転換期

一八〇三（享和三）年の第四次測量は伊能忠敬全国測量事業の転換期であった。それまで「浪人」身分だった忠敬は、一八〇五（文化）年の第五次測量から「天文方役人」に登用され、測量は幕府直轄の事業となった。客観的に見れば、加賀藩測量はどのような転換期にふさわしく、特徴のあるものだったといえるようか。

南北に細長く、かなり複雑な海岸線の能登半島を有する加賀藩測量は、六月二十四日（八月八日）（太陽暦八月十一日）九月二十三日）までの四十三泊四十四日（石川県内三十七泊・富山県内六泊）にも及んだ。次ページの地図は加賀藩領内での測量行程図である。（本稿では金沢藩とその支藩である大聖寺・富山藩を総称して加賀藩と呼ぶこととする）この行程図でのポイントは

- ①支藩の大聖寺藩と富山藩では、応対・協力体制に特筆すべき点はないが、金沢藩では警戒心をあらわにし非協力的な対応だった。
- ②能登半島では、今浜村から手分測量を実施した。

東海辺（内浦）・・・伊能忠敬・伊能秀蔵・香取慶助・小野良助・

伊能吉兵衛の五名

西海辺（外浦）・・・平山郡蔵・村津大兄・僕久兵衛の三名

- ③「糸魚川事件」は加賀藩領を八月八日に出た翌日の出来事である。

- ④福井（地図外）・大聖寺・金沢・富山の各城下をすべて訪れている。

（いずれも海岸線から数キロ内陸にある。日本列島を描き上げる

だけなら、ひたすら海岸線を歩き続ければ事足りたはずだ。伊能測量隊が必ず各藩城下に立ち寄っているのはなぜか？幕府御用としての制度上の必要からか、忠敬の個人的関心・好みからか、それとも、他に理由があったのだろうか）

二 「糸魚川事件」の伏線は加賀藩測量にあった

第四次測量での一大事件は「糸魚川事件」ということになっているが、ここ数年間の地元史料解説によって、「糸魚川事件の伏線は加賀藩測量にあり」との確信を得た。結果的には、記録の残る「糸魚川事件」が大事件として扱われることになったが、忠敬が『測量日記』（本稿では千葉縣史料近世篇『伊能忠敬日記一』を使用）に本音を記さなかった加賀藩における四十数日間こそが、彼の全測量事業の中で最も不愉快・不本意なものだった。これが私の結論である。

以後、数回にわたって加賀藩測量の実態について述べ、その根拠を示してみたい。

三 先触による地元への要求事項の比較

『測量日記』の中の先触によって、地元への要求事項を比較してみよう。①③、「※」、傍線は筆者による。また、読みやすいように、適宜「・」や「、」を追加した。

- （一）越前・吉崎浦にて―拒否されるとは知らずにこれまで通り

「国郡村名・村高・家数」を要求

此所より加州橋立村迄泊觸を出、

覚

- 一、我等儀就測量御用、明廿四日吉崎浦出立、大聖寺町迄罷越致止

「加賀藩測量行程図」



注
『伊能忠敬測量日記』に記載されている宿泊地を地図上に記し、おおよその行程を示した。ただし「今浜」から手分測量を行い、松波村で合流。さらに、甲村から船で能登島祖母ヶ浦へ渡り、再び手分測量をおこなって半ノ浦で合流し、船で所口町へ渡った。

1639年、3代藩主前田利常は隠居にあたり次男・三男に分封し、富山藩(10万石)と大聖寺藩(7万石)が成立した。

宿、翌廿五日同所出立、塩屋浦迄下り、夫より海辺通行、左之泊付之通①宿用意有之、尤道筋測量致候間、②国郡村名・村高・家数等小紙二書記、順村先江差出、其③村内致案内可給候

(中略)

松平加賀守領分

同国同郡

安宅浦

従是断ニ付、高人家を書さず

午後安宅浦ニ着、止宿田端町網七左衛門、此夜曇天不測量

右領分界より十村大庄屋の番代と云者出て案内す、村高・家数等問とも領主より差図なしと不言、其外山嶋を問共不言、漸測量地の村名を聞のミ、此夜曇不測量、元吉町迄泊觸を出す

(2) 加賀・本吉町にてー加賀藩領では「国郡村名・村高・家数」を要求せず

宮腰迄泊觸を出、此日慶助出勤

覚

一、明廿九日本吉町出立、海辺通り測量、宮腰迄罷越致止宿候間、①宿用意有之、尤二組ニ手分致し、老組ハ当所相川村江罷越し、夫より宮腰迄測量致し候間、右問之村々等も海辺其③村内致案内可給候、

(略)

同二日 朝々晴天、六ツ半頃宮腰町出立、「測量ニ量程車を用」四ツ後ニ金沢城下尾張町へ着、止宿※住吉屋太兵衛、

※御手判問屋。現在も旅館「すみよしや」として存続。

(3) 越中・泊町にてー加賀藩領を出て、再び「国郡村名・村高・家数」を要求する

泊町より泊觸を出す、則此所へ書記、前後者同案文ゆへニしるさず

覚

一、明八日泊町出立、海辺通測量、左之休泊順ニ罷越候条、①休泊宿用意有之、且②国郡村名・領主名・村高・家数等小紙二書記し、順村先江差出し候様執斗可給候、以上

八月七日

伊能勘解由

幕府直轄事業となった第五次測量では、どのような先触れが出されたのだろうか。若狭小浜藩の「記録附留帳」(小浜市立図書館蔵「酒井家編年史料稿本」収録の若狭佐野・野崎家収集文書)には、第五次測量二年目の一八〇六(文化三)年八月の先触が収録されている。

八月十一日、是ヨリ先、幕府測量方伊能忠敬ノ一行、山陰道雲伯沿岸ノ測量ヲ終リ、本藩若狭ノ海岸に及バントス、是日其先触ノ到着ニヨリ、小浜藩三方郡佐田村半太夫・早瀬村彦左衛門・佐野村卯左衛門ニ郡中ノ惣世話方ヲ命ス

「記録附留帳」(若狭佐野 野崎胸太郎蔵)

一、文化三年八月、御先触到来、公義御用御測量御役人御出被成候一、御用御先触

覚

(中略)

一、右通行筋村々領主姓名・国・郡・村高・家数、及海辺町数、其外名所・旧跡・名産等、別紙案文雛形之通相認メ、前々泊り宿迄持参可有之候

(中略)

書上案文 朱書ニ而本美濃紙堅帳 一国限り歟、一郡限り歟、

一組限り歟、何レ組合限り一帳ニ可認事

堅帳

村

一、高 何千何百何拾石何斗何升何合 何々誰領分 何国何郡何

一、家数 何百何拾軒 内 何百軒本村 何拾軒枝郷字何

一、人数 何百何拾人 内 男何人、女何人

一、海辺長 何拾何町何拾間 但シ何村境何村境迄

一、村長 東西何拾何町 南北何拾何町 内 何拾何町居村

何拾何町野間

一、御朱印高 何拾石 何社神主誰々

一、寺 何ヶ寺 内 何宗寺院 何宗何寺 何宗何院 何宗何庵

一、社 何々

一、名所 何々 旧跡 何々

一、古城跡 何山誰古城と不分ハ、誰古城と申伝へ候ト可認

一、名産 何々

一、居村 海辺迄何町 但シ居村海辺ニ候ハ、海辺ニ御座候認

一、当村 隣村何村、家居迄方角何、凡何町、其間田畑か山越しか

一、遠山見渡何山方角何、凡何里余

一、島幾ツ 何島 周リ何拾何町、家数何軒、何村ハ海上何里

一、何島 周リ何町何拾間、人家なし、何村 海上何里

右之通相違無御座候以上、何村庄屋誰印年寄組頭

何某守領分何国何郡何村何村

一、町六分図附札之是ハ絵図ヲタタミ上ノ表紙ニ

何某守領分何国何郡何村 但シ老間六尺、一町六拾間、

一町六分之割絵図

大図凡例

○朱 町在人家 ○青山嶽草木 ○黄 沙浜 ○紫 田畑

○青 海川沼 △朱 往還小路 卅朱 神社 ○朱輪斗寺院

此図は大村ハニヶ三ヶ村、小村ハ五六七ヶ村、図面ニヨリテ紙ト継合、勝手能可認

何某守領分何国何郡中引附絵図 是ハ絵図タタミ表紙ニ

一郡カ一組カ寄合テ可認引附絵図分量不定

是ハ郡中案内之絵図此方ニ而郡中壹枚ニ致、小浜組屋ニ而指出ス

凡例

□朱中白 本村 0朱中白 枝郷 ○青山嶽草木 ○紫 田畑

○青 海川沼 ○黄 沙浜 1朱 往還 卅朱 宮祠

○朱ニ而輪斗 寺院 △朱 測量通路 1墨 国郡村界

右之通御先触到来、甚六ツヶ敷様子ニ付、佐田半太夫・早瀬彦左

衛門・佐野卯左衛門、右三人御呼出し被仰付、右御測量中三方郡

惣世話方被仰付、八月十日ニ出浜、十一日ニ右之趣蒙御意帰リ申候

八月二十二日、幕府測量方伊能忠敬ノ一行小浜ニ到着ス、小浜藩三

方郡惣世話方ヲ増員シ、島浜村佐太夫・郷市村善太夫・川原市村弥

太夫ニコレヲ命ス

「記録附留帳」(若狭佐野 野崎胸太郎蔵)

右ニ付三人申合、西浦筋甚以不案内之場所故、十六日ニ早瀬罷出西

浦へ罷越、則敦賀東浜町橋本道莫子息貞治郎と申絵師相頼同道致、

万丈へ登リ、郡中引附絵図下拵へ致、夫レヨリ神子浦へ罷越、庄屋

治郎左衛門殿ニ一宿致、翌日舟ニ而常神へ参、夫ハ常神舟ニ乗小川

へ罷越、昼飯致、小川舟ニ而世久見へ参リ、夫レヨリ世久見舟ニ而

塩坂越へ参、海山へ越、海山舟ニ而沢寺下へ着舟致候而罷帰リ候處、

十八日ニハ御測量方大飯郡へ御引移リニ付、十九日ニ出浜仕、御役

所方へ罷出、色々御相談申上候、内廿二日、右御役人方小浜へ御着被成候ニ付、廿二日昼時分 組屋へ罷出、窺御機嫌申候處、右郡中引附絵図大ニ御意ニ叶候而、甚以首尾能納、甚以大慶致引取、其夜直ニ御役所へ罷出、右之趣申達候 (後略)

※福井県敦賀市の岡田孝雄氏が、右史料を含む『伊能忠敬の文化三(二〇〇) 年若狭・敦賀地方の調査・測量の実態について』(史料編・「考察編」)を出版予定なので、本稿では一部を紹介するにとどめる。

四 加賀藩の情報収集活動と領内への通達

(1) 幕府の通達

加賀藩が前述のような拒否的対応をした理由を探ってみると、幕府の最初の通達に行き着くようだ。『加賀藩史料 第十一編 享和三年』には次のように記されている。

二月十七日幕府勘定奉行小笠原和泉守より聞番呼立、天文方為測量伊能勘解由東海道より御国元へ相廻り候に付、覚書を以被仰渡あり。日記。十七日勘定奉行小笠原和泉守殿より、御城中の口へ今日御呼出に付、不破氏^{半蔵}聞番。為罷越候處、御勘定組頭田口五郎右衛門を以、天文方為測量伊能勘解由東海道より御国許へ相廻候に付、覚書を以被仰渡候。右勘解由は百姓跡浪人者にて、いまだ公邊へ被召出無之輕き者之由。

右の傍線部は加賀藩に限らず、第一〜四次測量を受け入れた諸藩に共通した認識のようであり、その原因は幕府の通達にあったことがわかる。『弘前藩御国日記』には、忠敬の身分について「伊能勘解由儀、帯刀御免斗ニ而、格式等無之ニ付、諸家方中小位之格ニ而取扱可然旨」とある。(増村宏著「大谷亮吉著『伊能忠敬』の日本測量について」、保柳睦美編『伊能忠敬の科学的業績』より)

(2) 情報収集活動

幕府の通達は国元の金沢へ伝えられた。加賀藩では測量隊の情報収集に努めるとともに、対応策の検討に入った。大聖寺藩では十村(他藩の大庄屋)手代が出入りの海運業者に情報収集を依頼した。この海運業者は敦賀の取引先へ飛脚を遣わし、敦賀近辺での測量や待遇の様子などの情報を入手し藩庁へ伝えた。このことは金沢市立図書館『加越能文庫』の『加賀藩十村役岡部家文書』『享和三年御用留』に綴られている。本稿ではその要点を次に記すが、史料全文は『加能史料研究 第5号』『伊能忠敬の加賀藩領内測量関係史料』(一九九三年三月)を見てほしい。(『加能史料研究 第6号』『加賀藩十村役の報告書に見る伊能忠敬の領内測量』と併せて読んでいただければ、加賀藩測量の実態がかなり鮮明になると思う。『加能史料研究』の問い合わせは、石川県立図書館史料編さん室まで。電話076-223-9579)

① 敦賀での様子

- ・測量隊の待遇は、町奉行が宿所へ見舞に出るなど、諸事予定より手厚くなった。
- ・部屋は四室入用。上の一室は忠敬、中の一室は弟子四人、次の一室は家来三人、もう一室は道具衆置場。
- 他に九尺×五間半ばかりの地面入用。

- ・出迎えは庄屋・年寄。村の間尺・家数・石高・領分等を質問し、村役人押印の書付けを取るらしい↓「六ヶ敷事ニ御座候」

② 加賀藩の対応

- ・村々の家数・村高等の書付けを提出しない。
- ・村境に杭木を打たない。

よそはよそ、加賀藩はこうだ、とばかりのお触れが領内に出された。

(つづく)

先触れ二題

渡辺 一郎

伊能隊通行の計画は、第一次測量では「勘定衆からの添え触れ」、

第二次から第四次測量までは「勘定奉行の先触れ」、第五次測量以降は「老中からの先触れ」によって事前に村々に通知され、通行を援助するように指示されていたが、これをうけて忠敬も自分の先触れを發して村々に要請をしている。日程がきまると忠敬はさらに宿泊日を指定して泊まり触れを發した。

先触れの控えは、いまでも各地の元大庄屋・庄屋宅などに可成りの量が残っているが、形式はほぼ一定で変わったものは少ない。ここにあげる二通は伊能測量がらみの少し変わった先触れである。

先触れ 一

享和三年九月十二日 佐渡において 手分け隊の平山郡蔵が發した触書

覚

- 一、馬 二匹
- 一、駕籠 一挺
- 一、測量器持人足 四人
- 一、同 手伝い 三四人

右は明十三日新穂町出立、新町までまかり越し候条、

宿用意これ有り、尤も人馬・駕籠・人足等は勝手宜しき方

繼ぎ立て、測量手伝い人足案内等は村界に待ち受け、御用差し支えこれ無き様取り斗らい給うべく候 以上

九月十二日

伊能勘解由手分け

平山 郡蔵

新穂より新町まで

右 間の村々

御役人中

追って申し入れ候、勘解由儀は夷町出立道筋測量致し候間、手伝い人足案内の儀は早朝より村界へまかり出候様取り計らい給うべく候 以上

(日本学士院蔵、伊能忠敬『測量野帳其他断片的書簡集』による)

「先触れ一」がのっている日本学士院の史料は写本で、大谷亮吉氏が「伊能忠敬」を著した際に筆写させたものと考えられる。文言に分からないところはないが、内容的に幾つか氣のつくことがある。

この先触れの発出者・平山郡蔵(一七七九—一八一九)は忠敬の内弟子でこのとき二四才、佐渡における手分け測量で分遣隊の隊長をとめていた。

忠敬の第四次測量の際の身分は、幕府勘定奉行から苗字帯刀を許されているが、天文方・高橋至時の門人ということであった。忠敬自身の名前で、勘定奉行から与えられた証文の写しを添えて先触れを渡し、あと旅行日程が決まってから「泊まり触れ」を出して村々の支援をうけていた。

平山郡蔵の「触れ」は忠敬の先触れが出たあとの「泊まり触れ」と

おもわれるが、高橋の弟子の弟子が幕府御用の触れを出すことができたというのは意外な感じである。忠敬はいつも証文の本文を懐中にしていたが、証文を持たず、証文に名前もない弟子が「先触れ」を出すのは少し行き過ぎの感じがする。あるいは、そのくらい伊能測量が理解されていたと認識すべきであろうか。

郡蔵は測量技術にも熟達していたし、二次・三次の測量でも、忠敬は作業隊より先行し、実際の作業は郡蔵が指揮してあとから宿につくという記述が日記によく出てくる。郡蔵が実務を仕切っていたとすれば、手分けの先触れ位出してもおかしくはなかったであろう。

先触れからうかがえる隊内の郡蔵の地位は副隊長といったところである。第五次以降幕府直轄の測量隊となり、同心の下役を配属されてから、郡蔵と下役たちとの折り合いが悪くなり、遂に郡蔵は破門されるのだが、それまでの作業において、若年ながら腕を振るっていたので、しぜん態度がでかくなって、その癖が御用測量隊になってもぬけなかったのではないか。これは何よりも忠敬が気を使わねばならない点でもあった。こんにちでも、小企業が大きくなってゆく過程でよくおこることである。

このときの第四次測量で伊能隊に与えられた証文の人馬は人足五人、馬三匹、長持ち一棹（持ち人足四人）であるから、郡蔵隊で馬二匹、人足四人をとると、忠敬隊は馬一匹、人足一人、長持ち一棹となってしまう。また、駕籠一挺と測量手伝い人足は証文には記されていない。つまり、この先触れは忠敬がどこまで知っていたかわからないが、非公式な先触れである。忠敬はこれまでも、証文の人馬以上の協力をうけてきているのは事実である。しかし管見では、みずから要求した記録は知らない。忠敬が承知しているかどうかは別にして伊能隊側から証文以上の要求をした珍しい記録である。

いっぽう駕籠はいつたい誰のための用意であろう。まさか郡蔵用ではあるまい。忠敬が無測量の移動の際に一部駕籠に乗ったことは、はっきりしている。しかし、もし郡蔵がまねたとしたら、とんでもないことである。万一、病人が出たときの救急車がわりであろうか。もしに備えて駕籠を村方で用意した例は記録に出てくるところがある。だがこの隊は若者ばかりである。貴重品の運搬用かとも考えたがそれも不自然である。

測量手伝いは三人ないし四人か、三十四人か、はっきりしない。これも各地で村方から多数手伝いが出ているが、伊能隊が触れを出して要求した例はない（第五次測量で村方に口頭で伝えて心得触れを出させて問題になった例はある）から、いずれにしても問題である。実際にはこの辺りでは人足は三十人くらい出ている可能性は大きい。

いろいろ詮索してゆくと問題を含む「先触れ」である。その意味で大谷亮吉氏が筆写させたものであろう。

先触れ 二

覚

一 軽尻馬 式匹

右は我等儀明後十一日佐原村出立、成田村泊り、同十二日朝同村より江戸亀島町測量御用所へ罷り越し候間御定め賃銭これを受け取り、書面の馬滞りなく継ぎ立申さるべく候、尤も行徳より乗舟の積もりに候、船老艘用意致さるべく、止宿の儀は着の砌申し談ずべく候
以上

高橋作左衛門手附手伝

九月九日

伊能 三郎右衛門 印

成田より

酒々井

臼井

大和田

舟橋

行徳

右村々宿々

「先触れ二」は世田谷伊能家蔵のものである。忠敬が二回目の九州測量を終わりに、黒江町の隠宅から八丁堀の亀島町に移って、地図御用所を開設してから後のものである。何かの都合で佐原に帰ったときのものであろう。

この先触れでは、忠敬の身分は高橋作左衛門（景保）の手付き手伝いとはっきり書かれている。天文方の手付きには、手伝いと下役の二種類あるが、忠敬は手附手伝だったことがわかる文書である。手伝いは与力と同格だったという。町奉行与力は二〇〇石で扶持米になおすと、二〇〇俵、ほかに役得もあって内福は豊かだったというが、忠敬は与力格でも四五俵、大分差があった。

景保の弟・高橋善助は第五次測量のみ副隊長格で従事したが、手附・手伝で身分上は忠敬と同格だった。また坂部貞兵衛は、はじめ手付き下役だったが、九州第一次測量から手附・手伝に昇格している。下役は従者をひとり連れてくるが、手伝になると与力格で、従者のほかに供侍一人をつれていた。もっとも高橋善助は供侍を連れていなかった

から供廻りも厳密なものではなかったかもしれない。

いずれにしても、忠敬の測量途上における村方の待遇は、上席の御家人として旗本とほとんど変わらなかった。ここに掲げた先触れは、亀島町の頃には忠敬は、自分で公用旅行の触れを出して佐原から江戸まで、お定めの賃銭で旅行できる身分であったことを示している。

軽尻は荷物を少し載せて人間も乗れる馬で、忠敬と供侍の二人分の馬の用意である。名前は勘解由と書くのが本のだが、三郎右衛門と書いている。理由はよく分からない。

「ニッポンを歩こう 伊能本部隊員選考会」

いよいよ始まる「平成の伊能忠敬 ニッポンを歩こう」の核となる本部隊員の選考会が、十月三十一日から十一月三日までの四日間、埼玉県東松山市を中心に行われました。

これは一九九九年一月から二〇〇一年一月までの二年間全コースを踏破するメンバー十五名を選ぶためのもので、渡辺一郎代表理事が選考委員長、佐藤嘉尚理事が選考委員として参加しました。

全国各地、遠くは韓国ソウル市から参加した本部隊員応募者二一名（内女性四名）は初日三十キロ、二日目と三日目は二十キロコースを歩き、全国踏破の足ならしをしました。

十一月二日には、伊能陽子、神保誠、吉野敏、永野達代、渡辺貞子の各研究会員も合流し、一緒に歩いた後、嵐山町の国立婦人教育会館において、渡辺、伊能、神保各会員がミニスピーチを行いました。

夕方から全員で懇親会になだれこみ、大いに盛り上がり、伊能ウォークの成功を誓い合いました。

伊能忠敬研究会は、日本歩け歩け協会、朝日新聞社とともにこの大きなイベントを主催しております。がんばりましょう。（佐藤嘉尚）

桑原隆朝 (つつき)

安藤 由紀子

測量出発前のトラブル

十七年、十回にわたる日本列島の測量行はそれぞれ特色を持ち、比較してみると大変面白い。伊能忠敬の能力にたいする評価を幕閣がどう変えていったか、藩に対してもその評価を認めさせるため、どう対処したかがありありと分かるからである。

この内、第一・第二次の測量行の他との際立った違いは、出発前にトラブルがあったことである。幕府は「伊能忠敬」なる者について何も知らず、手探りの状態だったし、高橋至時^{タカハシトキ}と忠敬の師弟^{ハヤシ}(間重富は大阪にいた)は、幕府にどれだけやる気があるのか、これまた手探りの状態だった。この薄暗がりの中に灯りをともした人物が、忠敬の義父にあたる桑原隆朝であった。両者の交渉が行詰まると、きまって忠敬は桑原宅を訪れる。『測量日記』を抄録して、この辺の事情を考えてみよう。ともかく測量隊が富岡八幡宮に成功を祈願して歩き始める所まで読み進むと、やれやれと安心するほどモメるのである。

第一次測量出発前―寛政十二年

幕閣と至時・忠敬師弟の蝦夷地測量に対する思惑は大変ずれていた。幕府はロシアの南下に直面して、少しでも正確な蝦夷地の地図が欲しかった。高橋至時は緯度一度に対応する地表の距離をどうしても確定

しなかった。これで地球の大きさが分かる。世界でもその確定値がなかったからである。なるべく遠い、正確な距離のわかる二地点の緯度の差が知りたいのである。

この師弟の天文学的かつ地理学的な使命は、幕府の外交上のあせりを利用するわけだから、絶対に伏せておかなければならなかった。

史料 一

『伊能忠敬測量日記』より抄録(千葉県史料 近世篇)

2/15 高橋先生から急の呼び出しで、奥御祐筆^{ゴウゴヒツ}・秋山様から伊能の身分と領主の氏名、持参する測器の数と大きさを問い合わせて来た由。その場で先生のお指図を受けて、『覚書』を書いた。明日先生から秋山様にお渡しくださるとのこと。

(突然の問い合わせのようにみえるがずっと前から根回しがあったに違いない。いよいよ幕府も動き出したかと師弟はワクワクしただろう)

2/22 先生の所へ伺って、測器のこと御相談、帰りに弥五郎(測器製造者)宅へ立ち寄って、前に注文ずみの中象限儀と方位盤を急がせ、夜帰宅してみると、今日一時ごろ御船手組の露木様が留守中お見えになり、測器船積み^{ソウキフネヅミ}の相談に來たのだが、明日朝また來るとお帰りになった由。

(全体の荷物を軽くするため、以前から新しく軽い測器を注文してあった。御船手組が来たことは、すぐに師に伝えられたと思う。さあ大変。船に乗せられてしまつては、地表の正確な距離が測れないではないか。何のために、遠路蝦夷地まで行くのか分からなくなる)

2/23 十時ごろ露木様が見えて測器を御覧、およそ長持ち一棹と

外に三個でいいだろう、とおっしゃってお帰り。

2/24

先生宅へ伺ってみると、先生は昨日大手様へお出で下さり、御用人へ「海上よりの測量と申し上げた覚えはなく是非陸行測量をさせたい」と言われた所、御用人は「勘解由は百姓身分なので、陸地の通行証文を与えた例もなく、測器は好きなだけ持って行けるから船の方が良いと評議されたのだ」とのお答え。先生、「船に乗っていたのでは陸地の測量は出来ません。ことに勘解由は、船が苦手です。ぜひ陸地を測量させるようお願いします」とお頼み。「では書付けにしてお出しなさい」と御用人。そこで先生は『申立書』をお書きになって今朝大手様宛てにお出しになったとのこと。

(ここで「大手様」といっているのは、若年寄・堀田撰津守正敦のことである。彼は大手門のすぐ外に住んでいたから、そう呼ばれていた)

3/21

桑原大人宅へ伺う。「蝦夷地御用の件、御上はもう決めておられる。ただ蝦夷地で測器の運び手が確保できるかどうかと思案なさっている」とおっしゃるので、「蝦夷地南岸は、天文測器だけ船に載せ、三、四か所で陸揚げして天測し、方位測器は持って歩いて測って行けば、人足も大部節約出来る」と申したところ、桑原氏は、その旨高橋氏へすぐ伝えるようにと言われた。帰って先生に一書認めてお届けした。

(一か月もなんのご沙汰もないので、陸行では幕府の気に入らず、計画は中止になってしまふのではなからうか。師弟はいらいらして待った。いよいよ、桑原隆朝氏の登場である)

3/27

高橋先生から呼出しあり。先生はわざわざ二五日に御登城、

秋山様(奥御祐筆)へ「蝦夷地御用の件のびのびになっておりますが、若年寄様へ伺ってみてください。勘解由は今度の御用のため測器を新調、近々出来上がり、七〇両ほどもかかっています」と申し上げられた由。すると若年寄様「それは早まったことをしたものだ」と秋山様に仰せられた由で、「御船手組の方もお見えになったので、いよいよ御用仰付けと思い、今持っている測器ではあまり嵩高いので新調に取り掛かったのです」とおっしゃってくださったとのこと。

(幕府は前年蝦夷地を一部直轄にすることを決め、御書院番頭(役高四千石)松平信濃守忠明、勘定奉行(役高三千石)石川左近将監忠房御目付(役高千石)羽太庄左衛門等を出向させて、蝦夷地御用係を新しく編成した。彼等のもとで蝦夷測量が行われる事になっていた。ここで「若年寄様」と言っているのも堀田正敦のことである。この年、若年寄は四人いたが彼の年譜によれば、「寛政の改暦」の功により將軍から「八丈織、五反」を拝領し、天文方の係りだったからである。

忠敬、高級官僚たちに怖じず

3/26

蝦夷掛の御目付・羽太様より御呼出しに付き先生御登城、「先の『申立書』の人足見積もり、あれではあまり多すぎる。蝦夷地騒ぎで人足不足の上、日光御法事も重なるので、御上も測量御用は来年に延ばそうかと思っておいでだったが、伊能がもう測器を新調した由、今年御用ときめられた。人足数を減らすか、船積みにするかどちらかにせよ。尤も測器を減らせと言っているのではない。来る晦日(カ)当人に会いたいので、伊能を当宅へ寄越すように」と仰せられた由。

(幕府もまったくむしのいいことを言うものだ。つまり、陸行したいのなら人足費は自分でまかなえということになる)

3/晦日

昼過ぎ羽太様へ伺うと蝦夷行きの新造船御見分のため御不在。四時ごろお夜食いだいてお待ちしていると、六時ごろ御帰宅。「ながく待たせてさぞ退屈、気の毒なことをした」とおっしゃって、敷居を隔てて御対面くださった。そして「蝦夷地は予想以上の大国で、日本の津軽から長崎くらいまであるそうだから、一、二年春夏ばかりの測量ではとても測りきれまい。そなたの優秀な名主としての経験を生かし、蝦夷地へ住込み、蝦夷人を教育し田畑を開かせてみて貰いたい。これは蝦夷係一同の頼みなのだ」とおっしゃったので、「有難い言葉ですが、御覧のようにあまり頑丈ではなく、また蝦夷地については何も知りませんので、今年から出掛けてみて、北極高度、方位など測り、あちらの様子を見届けてから考えたいと思います」とお答えした。「至極尤ものことだ」と認めてくださった。

測器の一覧表をお目かけると、又「船ではだめか」と言われたので、「天測の器具は船で先に蝦夷地へ運んでおき、陸地の街道は方位盤と長持ちだけ持って方位・距離だけを測り、帰りは天測道具を引取って三陸海岸を測って帰れば、街道とちがい人手も調達しやすいでしょう。将来は常陸から房州も測れば、御府内から蝦夷地までの海陸あわせた地図が出来るのです」と申上げた。羽太様は「では近々行われる松平信濃守様宅での会合に出席して貰いたい」と言われた。帰りに先生宅に寄り、御報告。

(羽太氏は蝦夷地は津軽から長崎くらいあると思っており、日本国の一部と認識していないように読める。忠敬はえらい人の前でも、物怖じすることなく、堂々として自説を曲げない。幕府はお金をけちっているのだから、自分で出す積もりなので何も怖いことはないのだ)

4/5

昨日羽太様から、松平様の御屋敷での寄合いに伊能をよこすよう、高橋先生に呼出状が来た。

史料 二

A三一 羽太庄左衛門呼出状(世田谷伊能家文書)

伊能勘解由事、来ル

七日四時、松平信濃守宅

寄合へ、御差出可有之候。以上

四月四日(寛政十二年)

羽太庄左衛門

高橋作左衛門殿

(さあ、又これからが大変である。役高千石の羽太氏なら一人で出掛けているのに、四千石の御書院番頭・松平忠明宅となると百姓身分の伊能には武士の付き添いが要るらしい。師至時はわざわざそのために登城し、御徒目付・細見様に相談し、自分の部下の門倉隼人を付き添わせることにした。七日、八丁堀中の橋で二人は待ち合わせる)

4/7

隼人殿と共に松平家へ出頭。お玄関で御徒目付・細見様を呼び出し、隼人殿口上を演じて、すぐ御帰りになった。

(多分、「佐原村百姓伊能勘解由、参上いたさせました」とかなんとか言ったのだろう。それですぐ帰ってしまうなんて、その形式主義がお

もしろい。例によって長く待たされ、夕食をご馳走になった。そして奥の間に案内され、御徒目付・細見さんが付添ったうえで敷居をへだてて、四千石と三千石と千石の三人の高級官僚に対面を許されたわけである。まるで映画を見るような場面が続くので、桑原隆朝には直接関係ないのだが、引用させていただく。

同日

松平信濃守様が、また「なぜ船ではだめなのか」とおっしゃったので「海上測量は不得手、長い船の旅では難渋いたします」と申上げると、信濃守さま「今後の御船通行のために、先年堀田仁助に海上測量を申し付けた所、帰りはやはり陸地を帰ってきた。不埒なことである。陸地ではなかなか海路のことは分かるまい」との仰せなので、「蝦夷地から奥州、常陸、上総、下総、房州から江戸までの連続した北極高度と方位、距離が分かれば、真の日本の形、ひいては海路も分かるのです」とお答えした。

(蝦夷地御用係トップとのこのやり取りを、じっくり読んでみると幕府はいったん事ある時には、武器や兵士を船で運ぶ積もりであり、安全で最短の海路と、蝦夷地の地形だけが知れたかったのだという事が分かる。新造船「政徳丸」まで作っている。しかし海路を知るためには正しい陸地の形状が必要なことを、信濃守はやっと納得したらしい。そして彼は、人足があまりにも大勢必要になるとブツブツ言ったあげく、次のように言うのだ)

同日

「蝦夷地で越年でもするならともかく、来月出立九月帰府で満足な測量は絶対に出来ぬ。私はかたく請合ってもよい。無限の天に詳しい身なのに、けし粒ほどの蝦夷地には暗いの

だな」とお笑いなさったので、「天は至大ではありませんが、一日、月、五星、恒星などは日夜見えます。蝦夷地は極小ですが、目に見えないので測れないのです」とお答えした。

御勘定奉行石川将監様は、何もおっしゃらずに書きものをなさっておいでだったが、私の方をお向きになって、「そなたは天文に詳しい人物とのみ思っていたが、代々の家柄で、自分の村のみならず他の村にまで仁情の由。そのような者を蝦夷地へ遣わして、測量不成功に終わらせたくはないから、来春に延ばした方がよいと私は思ったのだ」とおっしゃった。ご親切なこの御一言、身に染みてありがたく思った。

先年堀田仁助の作った絵図ともう一種類、二枚を貸してくださり、御前をさがって高橋先生宅へ回りご報告した。

(四千石の御書院番頭に笑われて、きちんと反論して立て派である。だが、まだ交渉はペンディングである。ずっと付き添っていた御徒目付の細見さんは蝦夷地にくわしいらしく、忠敬は帰りがけに「波が荒く天測器具を船で継送するのは難しいぞ」と言われている)

4/8

次のような『説明書』を書いて、これにお借りした地図を添えて靈巖島にある蝦夷会所へ持参した。

「一、お借りした地図は測量されていない所もあり、地図は連続して測量されていないと意味がありません。

一、昨日のお話では波荒く継送は難しい由、私出発前に重い天測器を松前に船で送っておいてさくくだされば、蝦夷地での人足は私が雇います。

一、帰りは奥州でも北極星の高度など測りたいので、重い測器の分の人足賃も私が支払います。したがって道中測量に差

支えないよう、お声掛け（先触れ）だけをお願いします」

（言いたい所だけ抄録しているので、ずいぶん威張っているように読めるが、「恐れ入り奉ります、もしお許しが頂ければ」という調子である。本音は、自費で雇うと言えはいんでしょということ）

4/18

高橋先生からお手紙。「十五日登城、羽太氏にお会いした所、『船で天測器を運べば万一延着の恐れもあるから、自費でなら初めから持っていた方がいいかも知れぬ』と言われました。この間の上申書は大変有効でしたね。また松平信濃守様宅で寄り合いがある由、麻上下ご用意の上お待ちください。また隼人の付き添いが必要のかどうか」とあった。

（幕府の本音も、はっきりしてきた）

4/22

体調が悪かったが、信濃守様宅へ参上。えらい方々の面接はなかったが、細見様外お立ち会い、「『道中人馬触れの御証文』は出しにくい。御上の御下賜金少額でも、今度の御用お受けする気があるか」とお尋ねに付き、「道中滞りなく御触れさえ下されば、自分費用で勤めます」と申し上げた。帰りに先生にご報告。一日中雨、病中大変だった。

（やはり、お金がすべてを解決したのだ。『御添触』（これは人馬賃が有料）でもいいから、出してくだされば費用は自分で払い、しかも重い測器も船送りは止め最初から持って行く、という新しい『願書』を出してやっと一件落着した。公費は一日たった銀七匁五分、費用は測器の分は別として、百両近くにもなった）

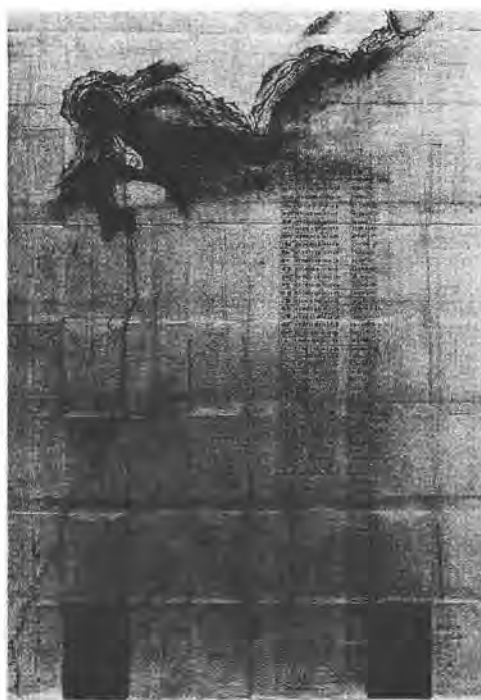
閏4/5

佐原村領主・津田氏へも報告書を出した。「私は上総生まれて下総に養子に参り、米取り引きの関係で常陸・房総には

知人も親戚も多く、あちこちに逗留して地図を作りたいと願っていました、願いのかなう道が開けました」と書いた。

（領主にも説明し、やっと安心して報告のため桑原宅へ出向いた忠敬は、右の領主宛報告書にもあるように、実は奥州から常陸・上・下総・房州・御府内までの海岸線を、引続き測量したいのだがと打ち明けた。桑原に「書類に持っておいでなさい。御内覧に入れる機会もあるでしょう。口上ではなかなか通じかねるものです」と言われ、早々と第二次目の願書を彼に託した。内覧したのは、もちろん若年寄堀田正敦氏であろう。最初の旅立ち前から、伊能忠敬はすでに第二次の構想を持っていたのである）

（この項につづく）



渡辺一郎『伊能測量隊まかり通る』より

参考文献

『伊能忠敬測量日記 一』

「世田谷伊能家文書」 A 三一

千葉県史料・近世篇

伊能家文書紹介十 その二

山川湊の風

伊能 陽子

初めて訪れた薩摩のくに、鹿児島は、どこにもかしこにも「歴史」が息づいていて、それを伝えて来た人達の暖かさが感じられた。太陽に育まれた人情の、おほらかさであろうか。

手元にある鹿児島関係の書き付けを、とにかく読んでみようと思決心したもの、増村宏著「伊能忠敬の屋久島種子ヶ島測量」及び「鹿児島史料集(X) 伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説」に、多くの資料と研究が掲載されており、読むほどに私など出る幕ではないと落ち込むばかりだったが、とりあえずこれらの文書を手掛かりに、二百年前を覗いて見ることにした。

前号苗代川文書の差出人松元十郎兵衛と、同じく薩摩藩測量隊付添い役、野元嘉三次の手紙である。九州の測量は、第一次の文化六年八月江戸出立から、第二次の十一年五月帰着までの約五年間とその前後であるから、ご両人と忠敬とは長いお付き合いであった。

例によって、測量前に地元資料を整えて提出せねばならず、受け入れの指図をするためには、測量隊の動きを正確にキャッチして必要な事柄をしっかりと把握しなければならない。勿論、大変な費用がかかる事だから、国元の意向も十分に心得、緊密に連絡を取らねばならない。担当者としては、気苦労の多い年月であつたろう。そのような様子が、次の書状からくみ取れないだろうか。

史料 一

B 一八三

(世田谷伊能家文書)

一筆致啓上候 追日
冷気相増候得共 各様

弥御堅勝 被成御廻勤

乍御大儀 珍重奉存候

然は 去月十四日 於江府ニ

牧野備前守様より 此方

留守居 御呼出にて 領内

種子嶋并屋久嶋へ 来未

三四月頃 六七月頃ニ無之候ては

往来難相成由ニ付 一先

他国御廻勤有之 時候

御見合 中途より御立戻

右嶋々へ 御越被成候間

其心得にて 御差支無之様

御渡海の儀 取計可申旨

被 仰渡候付 即 主人より

御請被申上候 依之

別紙ケ条書を以 此方

手当心得の趣 御尋申越候間

乍御面働 逸々 以御附札

御答承知仕度 奉存候

此段 態と 飛脚を以 得

貴意候 恐惶謹言

十月二八日

野元嘉三次

花押

伊能勘解由様
坂部貞兵衛様

追啓 日増寒氣相募可申候間

折角 御自愛御凌被成候様

奉存候 乍慮外 御同列の

御方々へ 可然様 御伝達被下度

奉頼候 此方御付廻相勤候面々よりも

厚宜 得貴意度申聞候 以上

『 (前略)

さて、去月十四日、江戸におきまして、牧野備前守様より当方の留守居役にお呼び出しがあり、領内の種子島、屋久島へ来年三四月頃、六七月頃でなくては往来が難しいので、ひとまず他国をお回りになり時候を見計らってお戻りになって、右の島々へお越しになられるとの予定で、差し支えないように渡海の準備をするよう、ご命令がありましたので、主人はお受け致しました。ということで、別紙箇条書きにより当方のなすべき事などお尋ね致しましたが、ご面倒でございましょうが、一つ一つ札を付けてお答えを頂きたいと存じます。この事、特に飛脚便でご意向を伺いたくお願い申し上げます。

(後略)

史料 二

B二〇六

(世田谷伊能家文書)

一筆致啓上候 未余寒強

御座候得共 各様弥御堅勝
被成御廻勤 乍御大儀

珍重奉存候 然ハ去十月

以飛札 御掛合申上候通

当領内 種子嶋并屋久嶋へ

当春より夏末ニかけ

御往返可有之旨 於江府

牧野備前守様より 御達

御座候付 弥 当三月 領内へ

御差入可被成哉 於其儀ハ

何国より御引返 且 御立戻の

御人数 又ハ 御入用の人馬

或ハ 御宿り駅等の儀 別紙

箇条書を以 御尋申上訴候處

其節の御返書ニ 未 月数も

有之 何国より御引返ニ

可相成 程合も不相知 且

領内へ御差入の節 殊ニ寄り

御手分ニテ 大口通も御通行

可被成哉 御帰路の節

紙屋口へも 御出抜可有之哉

右ニ付ては 当領内ニ不隔

日州街道御通行の御手配も

御座候間 猶 追々御取しらへ

宿次を以 御細答 可被仰聞候間

其節迄 従是相伺候ヶ条書

御頼被置候段 貴報の趣

具承知仕 其以後 折角

御左右相待 罷在候得共

今以 否の御模様不相分候

然處 先達ても 微細ニ

得貴意候通 此節又候

御立戻ニ付 諸手当向

御小家方と違ヒ 聊の儀迎も

夫々受持の役場手数ニ

相渡ル儀ニ御座候得は 万端

差掛致承知候ては 事品ニより

御間ニ逢兼 不都合ニ成立候故

前廣 得と手当申渡候

御座候間 去冬進達仕置候

箇条書ニ 逸々以御付札

御細答 被仰聞 被下度 乍

御面働 奉頼候 此段 以飛札

猶又 相同道 如斯御座候

恐惶謹言

正月十三日

野元嘉三次

花押

伊能勘解由様

坂部貞兵衛様

追啓 余寒の砌 折角御自愛

御凌被成候様 奉存候 乍慮外

御同列の御方々へ 可然様御伝達

被下度 奉頼候 呉々も三月迄ハ

最早豫月も無之儀ニ 御座候間

当年御差入の有無 御治定の程

何卒 早致承知 安心仕度奉存候間

若 万一此節迄も 御取しらへ不相濟

表向貴答 難被仰聞 御訳合も

御座候ハハ 御内含の趣ニても極密

被仰聞被下度 厚奉頼候 以上

『(前略)』

さて、去る十月飛脚便で申し上げましたように、我が領内の種子島、屋久島へ、今年の春から夏末にかけて往復なさることを、江戸において、牧野備前守様からお達しがありました。

いよいよこの三月、当地へご入国になられますが、それにつきまして、どちらの国からお引き返しになり、そしてお戻りになる人数、またはご入用の人馬、或いはお泊まりの宿場のことを、別紙箇条書きによりお尋ね申し上げました。ところが、その時のお返事では、まだ先のことであり、どこから引き返すか予定もわかりかねるとのこと。

またご入国のとき、ことにより二つに分かれて大口通りもご通行になられるのか、お帰りのとき紙屋口へも通り抜けることがあるのでしょうか。このような事は我が領内だけでなく、日州街道ご通行のお手配もありますので、なお順次お調べのうえ宿継ぎにより、詳細なお返事

を頂きたく存じます。

それまでに、これからお尋ねする簡条書きにお頼まれたこと、ご意向をもれなく承知致し、その後つとめてお指図をお待ちしておりますが、いまだにどのような様子か分かりません。

ところが先だっても詳細にご意向を伺ったように、今またお立ち戻りについての諸費用のこと、小家の方々とは違いますので、少々のことでも、それぞれ受け持ちの役目手数にかかわってまいります。すべて差し当たりは心得ていても、事柄によっては間に合わず、不都合なことにもなりますので、まえもってしっかりと準備をさせたいと思います。

去る冬に差し上げてあります簡条書きに一つ一つ札をつけて、詳しくお答えを頂きたいとご面倒ながらお願い致します。急ぎの手紙により、此の件重ねてお伺い致します。

(中略)

くれぐれも、三月まではもういくらも御座いません。今年お出でになるのかどうか、お決まりのことをどうぞ早く承知して安心したいと存じます。もし万一、この度もお調べが済まず、表向きのお答えが頂けないご都合でも御座いましたら、内々のおつもりでも極秘にお知らせ下さるように、是非お頼み致します。

史料 三

B二〇八

(世田谷伊能家文書)

以別紙致啓上候 然は

当領内 於長嶋二七島

絵図の儀ニ付 私共兩人へ

委曲被仰聞候趣 城下へ

罷歸候上 其筋取扱の

役人共へ 具申聞 早速

しらへ方ニ取付候処 往古より

有之候絵図面の内 少々宛

不行届儀も御座候付

細密に相記候ニ付ては 何連

七嶋の者共へ 不相糺候ては

明決難仕所も 有之候得共

最早旬季相後レ 飛船迎も

通融難叶 不及是非

当年通船之時節 相待

罷在儀ニ御座候 依之

右絵図面 急速ニ致進達

候儀 相調兼候間 今暫

御猶予 被成下度奉存候

此段 乍序 得貴意置候

以上

正月十三日

松元十郎兵衛

野元嘉三次

伊能勘解由様

追啓 寿右衛門事 先達て

致改名候付 此段も得御意候

『別紙にて差し上げます。さて、当領内の長嶋で七島の絵図について、私共兩人へ詳しい事情をお聞きになれましたが、城下へ戻りまして係の役人たちに詳しく問い合わせ、早速調べさせました所、従来の絵図面のうち、少々だけ不備なところもありました。詳しく記すためには七嶋の者たちへ問い合わせなければ、はっきりしない所もありますが、もはや季節がはずれ、飛船も融通できず、仕方がありませんので今年の船が通る時期を待っている次第で御座います。

このようなわけで、右の絵図面を急いで差し上げることができません。今しばらくご猶予下さいますように、よろしくお願い申し上げます。

(中略)

追伸 寿右衛門は先だって改名致しましたので、これもお知らせ申し上げます。

どの書状も、月日しか載っていないので文中の「来未」とか「当三三三」とかで、一応順を追ったつもりだが、だんだんに差し迫ってくる種子島・屋久島の測量についての質問状に、忠敬からはっきりした返事が来なくて、ヤキモキしている様子が行間から滲み出ている。それにしても、寿右衛門さんは何と改名したのである。

薩摩藩、種子島とも財政困難な中、大規模な測量協力を得てその測量を終えた忠敬は、全国実測が終結に近づいたことを娘妙薫宛の手紙の中で「諸侯大名のお取り成しのおかげ」と感謝しているが、いつでも、どこでも一番苦労したのは、実際に動き回った人々であった。それらを含めての「天命、先祖よりのご礼徳」への感謝としたい。

余談になるが、鹿児島を訪れたもう一つの目的は、母 多嘉子の曾

祖父にあたる島津藩の学者、伊地知季安の墓参であった。母の果たせなかった念願を、黎明館の方々のお骨折りで実現できたことは、嬉しかった。地元の方には、「伊能忠敬」と「伊地知季安」がなかなか結び付かなかったようだが、無理もないこと、二百年後の鹿児島島の伊地知家と千葉の伊能家の縁組など、思いもよらぬことである。

そして、もう一つ繋がっていた糸は、忠敬の墓碑文の作者であり、孫忠誨の師であった佐藤一斎である。季安は天保十一年に桂庵禪師の碑銘を一斎に請い、しばしば書をおくり厚く謝意を表したことが、記録に残っている。

第一次九州測量中の文化七年七月に、鹿児島島の山川湊で海を見ていた六五才の忠敬。その湊から、島津重豪の逆鱗に触れた季安たちは、喜界島へ流されていった。季安二八才、文化六年のことである。そして、赦されて鹿児島島の自宅へ帰ったのが文化九年であった。

ほとんど時を同じくして、山川湊の風を、それぞれどのような思いで受けていたのだろうか。江戸時代の薩摩、現在の鹿児島、私にとつて、どちらも魅力に溢れている。



鹿児島県 種子島 伊能忠敬墓

忠敬さんは歩測がお嫌い 〈二〉

女めあかし 永野 達代

前号はゾーツとしたところで終ったが時間が経って落ち着いてくると、その間の苦労話をして仕様がないので、結果だけ付録としてこの稿の最後でご覧頂くことにする(二七頁図3)。

続けて大チョンボの解明に挑む

さて再び忠敬さんの行動を追ってみるとしよう。

第一日は隠宅から司天台までの歩測をし、自宅へ戻り作図をして、二点間の直線距離をかき入れる。つまり往路と司天台、隠宅間の直線、それにそれぞれの距離を書き入れた図をつくる。

第二日はそれを懐に再度歩測をしながら司天台へ行く。この日測った距離が改である。

前号に書いた「往路の最小単位が間であるのも納得できるような気がする」ということに對し、数人の方からあれはどういうことであるのかと質問を頂いた。

ここが大チョンボの最たるところなのでわざと書かないでおいた。

山場を後半にもってくるといふ高度なテクニックを使ったのである。私の頭には或る仮説があった。それを裏付けるものが佐原村歩測図にかかれていることを伊能陽子さんから電話で伺い、研究会総会の折に实地調査を試みたいという気持ちもあって、コピーを送って頂いた。江戸歩測図に先行する図である。

これが又面白い。内容を発表してしまうと、忠敬ファンに首をしめられそうなので、一人で楽しむことにする。

二箇所「津田様御定杭」と記されているので、領主津田山城守との関係が示唆されなくもない。

さて、その佐原村歩測図は案の定、堤や農道とおぼしき場所を測量しており、数カ所ではあるが〇間半という記述がある。細い田圃道なので半間が最小単位である。間単位では行き過ぎてしまうのである。それに比べて江戸の街路は広い。普通の道で京間五間から六間というから約九・九mから十一・八m。正確な資料はどこかに仕舞込んで見つからないが、奥州街道の司天台の前の御米蔵の火除地を兼ねた広小路は、たしか二五m位だったと思う。

忠敬さんは気持ちが悪かったに相違ない。さすがは江戸だ。三歩どころか六歩行こうが七歩行こうが、田圃に片足つまこんだりはしない。自分の三歩一間に都合をあわせて曲ればよいのである。

これが質問の往路の最小単位は間で納得の答えである。しかしこうして忠敬さんの側にたって考えてみると、どこのどなたさんが言うておいでか知らないが、大チョンボ等とんでもない。一間単位ということは、実に合理的で自然なことなのである。

推歩先生

忠敬さんは推歩先生とあだ名されていたという。

つけられた理由ははっきりしないらしいので、私自身かなり気に入っている取って置きの想像をご披露する。

推歩とは広辞苑をひくと「天体の運行を推測すること」とある。

私はこれを地上におろしてみる。

あろうことかあるまいことか、一間単位の地図を、我等が忠敬さんは、当代屈指の天文学者達に提出してしまったのである。

嗚呼 やんぬるかな

自分の歩幅に都合をあわせて作った地図をみせて、「これこそまさに推歩だ」と彼らにわんわん喜ばれてしまった。そして挙げ句は師^{オヤジ}に「推歩先生」とやられてしまうのである。

あるいはいつまでも上達しないので、後になって言われるか。

測量家伊能忠敬への第一歩

しかしこの日、忠敬さんは初めて測量の手ほどきを受けることになる。そのことは前号二八頁上段の表、往路と復路の性質の違いがあらわしている。往路はみてきたとおり忠敬さんの自己流である。

目標物を設定すること、もっと細かく測ること、そしておそらく道路のどこを測るかも習ったであろう。しかしまだ、あまりうるさいことは言われていないようである。せめて一歩単位でいうところか。

司天台を出たところの「百三十八間」これこそが測量家伊能忠敬への第一歩なのである。

この歩測図は距離、地形をあらわしているだけではなく、ここからは忠敬さんの一日という時間と、アマチュアからプロへの変身の瞬間のドラマをも読み取れるのである。

ここを書きたいがために行動経路や往路復路をくどく言ったのである。渡辺忠敬さんごめんなさいでした。

復路、忠敬さんはさっそく先程の師の教えを実行にうつす。はじめてのプロのやりかたなのだから、緊張と喜びでいっぱいだったであろう。最初の目標物木戸までは丑の方向へ百三十八間。次の目標物泥鰌汁までは丑五分五厘の方向へ百九十六間六六。ちゃんと二歩で止まっている。よろしい。屋号ではなくて泥鰌汁と記しているのがおかしい。

どういう料理なのだろう。忠敬さんの好物なのか。墨で黒々と泥鰌汁と書いてある障子が目にうかぶ。突然ですが江戸時代の勤め人は、お昼ご飯はどうしていたのでしょうか。どなたかお教えください。

次の目標物は駒形堂。推古天皇三十六年(六二八年)漁師の松前浜成、武成兄弟が、観音像を拾い上げたのがこのあたりである。

君はいま駒形あたりほととぎす

高尾大夫の心を乱した悪いやつは、お信さんの父桑原隆朝が仕える仙台藩の伊達侯である。

駒形堂は勿論のこと、忠敬さんが歩いているこの奥州街道の様子や雰囲気は、西側の閻魔堂、正覚寺、諏訪明神あるいは木戸などと共に、年代はすこし下がるが、江戸名所図絵その他から知ることができる。

浅草寺に入り風雷神門、仁王門、観音堂、隨身門を目標にして歩測を続ける。

隨身門(今は二天門)は、やはり元和四年(一六一八年)の建立であるから、我々は今、忠敬さんと同じ門をくぐることができるのである。前出の松前兄弟と、彼らと共に浅草観音をおまつりした土師中知の三人が三社権現の祭神である。この三人の子孫達はその後明治まで、代々観音様にお仕えしていたと言うのだから壮大な話である。

さて忠敬さんはと見れば大川橋(吾妻橋)もちゃんと測っている。

この橋は安永三年(一七七四年)の架橋である。両国橋が万治三年(一六六〇年)の完成であるから案外新しく、忠敬さんが測った時はまだ二年しか経っていない。橋の袂に番小屋があり、渡り賃は二文。

ちなみに新大橋完成をよろこぶ芭蕉の一句

ありがたや いただいて踏む橋の霜

前号で、なぜ多田の薬師堂を歩測しているのかわからないと書いたが、大川橋東詰五間三分のところから南への道は、なんらかの外的要

因により歩測不可能だったので、「此間不明前後ニて記」の記述となり、多田の葉師堂から新たにやり直しているのである。

一度切れているのであるから、作図は当然図1のa地点から北へむかっておこなった。ここでθ説はいさぎよく引込めることにするが、やはり図1のb・c間の行動は不審である。

大きな声では言えないこと

読者ゼロという事態になることを恐れて、センサーショナルな題をつけてしまった。まんまと引掛かって、今ここを読んで下さっている方に謝謝。しかしこの題がまったく見当外れという訳ではない。

重複して歩いている道が数カ所あるのに再測していないし、前の図に描きたさないで、往路の平均値をだすか或は第二日目の歩測成果だけで、別の紙に描き直さなければいけない。

何等かの志を抱いての出府や、資料から察せられる、厳格な人間性や仕事ぶりと言う先入観が邪魔をしているのだろうか、それにしても熱心とは言い難い。先に緊張と喜びでいっぱいだろうと想像して書いたが、やはりイイイイやっているような印象である。

大谷亮吉氏は著書「伊能忠敬」で「この図に記せる距離は凡て歩数により極めて粗雑に測りたるもの、如く何れも皆實際距離より著しく短縮せるを以て真距離の明らかなる部分より推究してこれを改算せり」とバツサリやっておられる。

この大谷氏の文は次の章に入れたほうが適切だったかもしれない。忠敬さんはバリバリの実業家として生きてきた人である。

フィールドワークのやり方がわからないというか、感覚のようなものがわからなかったのではないだろうか。

誤差の原因の追及

どうしても心にひっかかることが二つある。

一つは私は短い距離ではあるが二箇所リラックスしながら歩測をし、誤差はどちらも二％に近い一％台であった。その体験があるので、十数％もの誤差はとも考えられないのである。

もう一つは歩幅である。一間を三步で歩いたとすると一步六〇・六センチとなる。私の歩幅は六七・五センチ。身長は十センチかもう少し忠敬さんより高そうだが、それでも男性の忠敬さんの方が、七センチも歩幅が小さいとは、どうしても思えないのである。

では忠敬さんの歩幅が六〇・六センチより大きいとすると、意識的に歩幅を縮めて、一間を保ちながら歩いたことになる。しかし往路にみるように、第二日目の歩測である改は、軒並み数字が減っている。

ということは歩幅がひろがっていることを表すわけで、意識的に歩幅を縮めているのならば、そのことに気付く筈である。

やはり自然体で歩いたとみるべきであろう。

図3をご覧頂きたい。私の復元図との比較のために、忠敬さんの歩測図は司天台を軸に時計方向へ少しずらしてあるのだが、それは一二三・二％に拡大すると、復元図とかなり相似形に近い形になる。

自分でも雑駁な印象と書いているのに、憎たらしくもわざわざ大谷氏の言葉を引用すれば、極めて粗雑ではこのように形体は整わない。極めて粗雑なのではなく小さい（短い）のである。

これは歩測図の全ての距離に、同じ率の誤差があるということである。その誤差の正体は何か。そこで女めあかし渾身の推理の登場である。

前号二八頁下段、佐久間さんがだされた歩幅からの計算、二五・三三センチ。これを私は忠敬さんの足のサイズとみる。

第一回会合の時、富岡八幡宮で各自の歩幅を調べた。私はスタートラインに爪先を付けた。世話役が踵からですという。爪先じゃないんですか。踵です。踵からスタートの経験などないのだから、納得しないまま歩きました。今思えばあの時の生真面目風オニさんは新沢さん。江戸博広場での歩測大会のお世話のとき、同じことをする方は結構見かけた。忠敬さんもこれをやってしまったのではないか。

畳のへりに爪先をつけて一、二、三步で反対側のへりに踵をつける。これが忠敬さんの歩幅にぴったり合ったのである。なんという好都合。なんという悲劇。最初の一步をへりの外に置いたがために、忠敬さんは一問プラス自分の文数を、一問と思ひ込んで測り続けるのである。かわいそうな忠敬さん。

しかし、その後の忠敬さんの腕の上達ぶりは、凄まじいばかりである。どんな世界でもだいたい十年が一通りの仕事を覚える目安であろう。

もちろん師至時の強力なバックアップがあったことであろうが、忠敬さんは五年で第一次測量に出発してしまうのである。

ほとんど自費といっても幕府の許可、協力を不可欠とする重大な仕事である。同行者は内弟子と従者だけで教えを乞える師はいない。

忠敬さんはなんと五年で実戦に使える知識、技術を習得したのである。

*

*

先日、明治七年模写の伊能中図を、はじめてルーペで覗いた。描手たちの仕事には凜とした姿勢と緊張感が張りつめられていた。時を越えて彼らも伊能プロジェクトのメンバーなのである。

伊能図を滔滔たる大利根の流れに擬するならば、この歩測図にはまさに源流の最初の一滴がしたたり落ちる様子がえがかれているのである。そして沢山の支流を抱き込みながら大河となつてゆく。名を残すことのなかった大勢の人達にも心をはせながら、扉を閉めることにする。

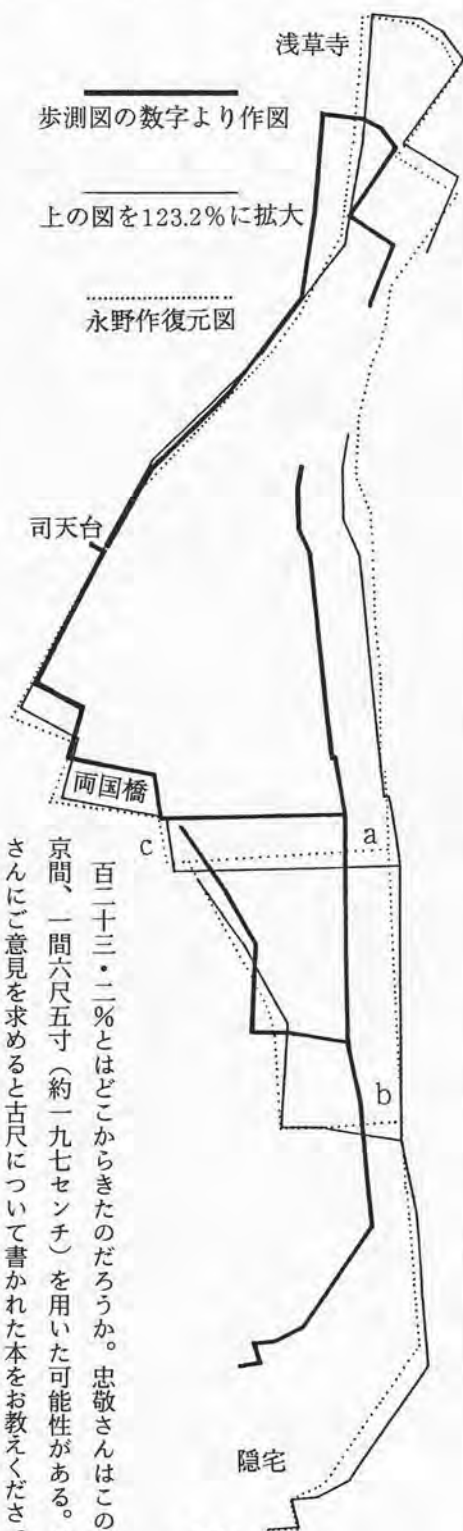


図3

百二十三・二%とはどこからきたのだろうか。忠敬さんはこの時は京間、一間六尺五寸(約一九七センチ)を用いた可能性がある。藤岡さんにご意見を求めると古尺について書かれた本をお教えくださった。このころの江戸での江戸間、京間の使われかたにお詳しい方、どうぞ御教示ください。もう脳がパンパン。はやく普通の人に戻りたい。

女めあかし様

大内 繁男

『伊能忠敬研究 第一六号』歩測図の謎とくに参加させてください。
お手数ですがお取り次ぎを宜しく願います。

たのしく拝見しました。私見を記しましたので、読んで頂けました
なら幸いです。

図2から今様に見ますと、閉合方式の多角測量による地点の確定の
ようです。トラバース測量とか、骨格測量ともよばれ、目的は地形図
を作成する前段の測量です。

机の上に糸をリング状態にしてください。このような測量の径路の
接点を閉合点といいます。図1のc点です。ここでのズレが許容範囲
以内にあれば測量はおわります。

しかし誤差があります。この誤差を最小限にするのが補正です。方
位角と距離に修正計算がなされます。

改：測量値に補正された距離

六分六、三分三：方位角の補正量

のようです。

六分六、三分三について

全方位角三六〇度の読み取りは一支十等分二二×一〇＝二二〇分で
すから最小メモリは 三六〇／二二〇＝三度／分 となります。

最小メモリの一分を三等分して

一度 一／三＝〇・三三 三分三
二度 二／三＝〇・六六 六分六
と記号化したのではないのでしょうか？

司天台、多田の楽師堂はオープン測量点といい重要度の低い対象に
もちいられます。

a—c間の三一〇間は視通距離としては長く見通しが困難ではない
でしょうか。

この測量が隠宅と司天台との位置関係の確定ならば、閉合点を隠宅
にすべきです。

a—b—cの径路を、記載のデータを用いて一／一八〇〇で作図し
ました。結果はc点の補正後で閉合点は三七間のズレでした。再測で
す。

多角測量では往路復路の考えは見当たりません。出発点、到着点の
一ルートです。

測歩について 地理院のOBに忠敬さんは一・八mだったようだ
と聞いて試したことがあります。測歩ならこのほうが合理的だと感じま
した。

測歩は一・五mを二歩で測り一測歩と呼称し、水準測量に利用され
ます。

(おおうち しげお・マップモニター)

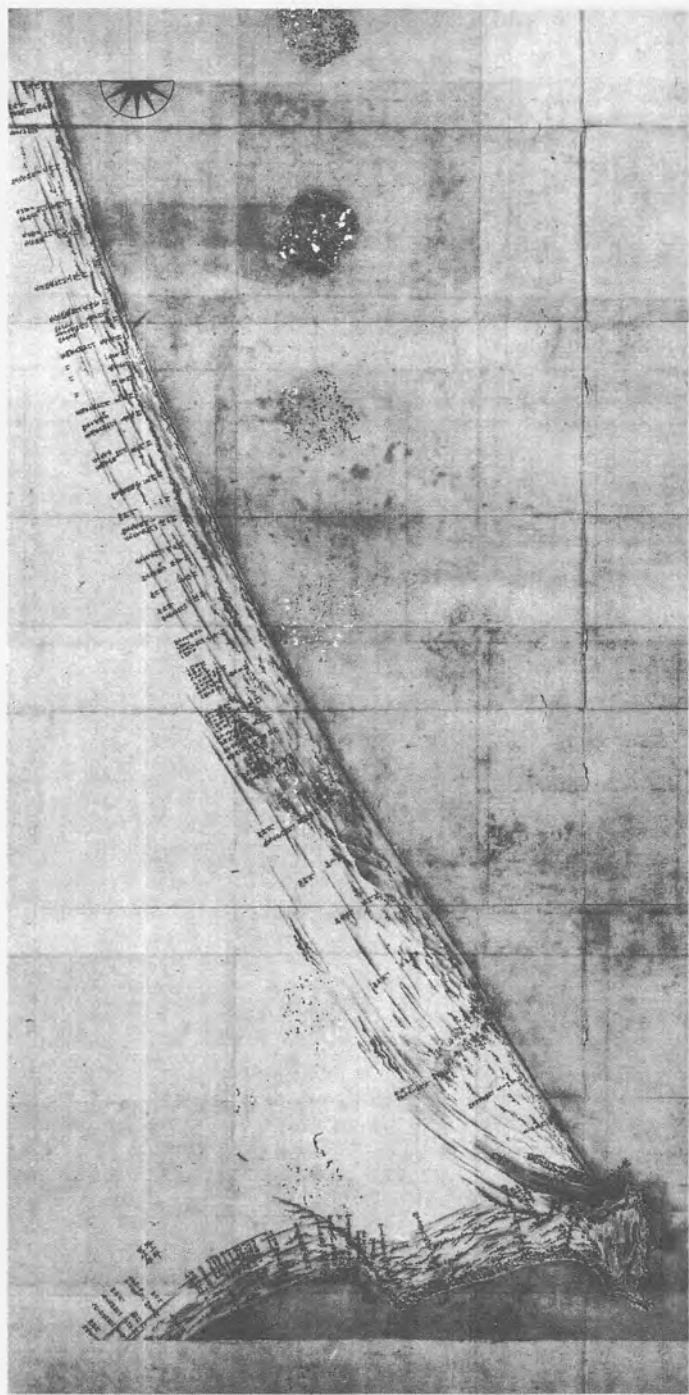


図5 自江戸至奥州沿海図第5 (自井戸野至滝浜)

犬吠崎周辺と鹿島灘沿岸である。測線は犬吠崎南側の断崖地区を避けて街道筋を
銚子に向かい、あと北側から海岸を廻り込んで測量可能部分だけを測っている。
測線以外は概略の地勢を絵画風につけ加える。 (180 × 89 cm)

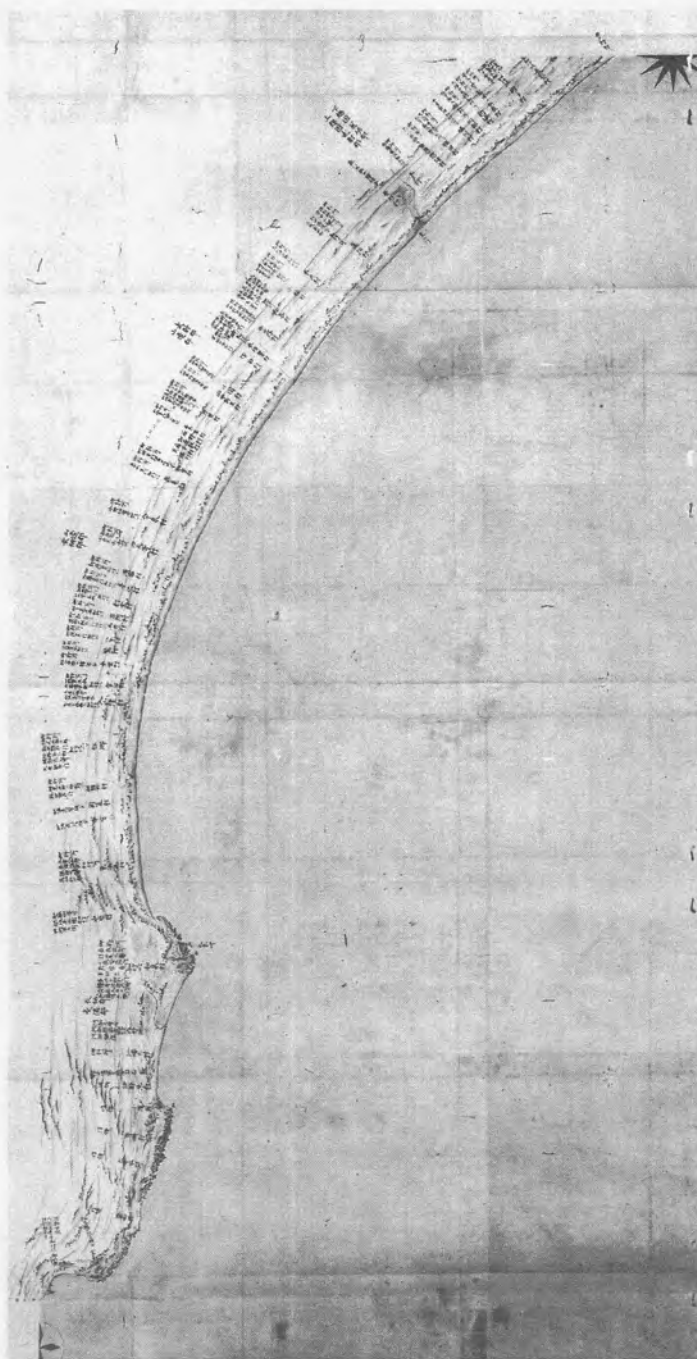


図4 自江戸至奥州沿海図第4 (自御宿至井戸野)

御宿から太東岬まで岩壁の海岸は内側の道路を測り、外側に絶壁の様子を絵画で描く。九十九里浜は砂浜の海岸を測線が走っている。途中に2ヶ所、測線の枝線が中里村(現在の横芝町)と屋形村(現在の白子町)に伸びて、天測がおこなわれている。横芝町の測量の際に父神保貞恒の墓参をおこなっている。(169×88cm)

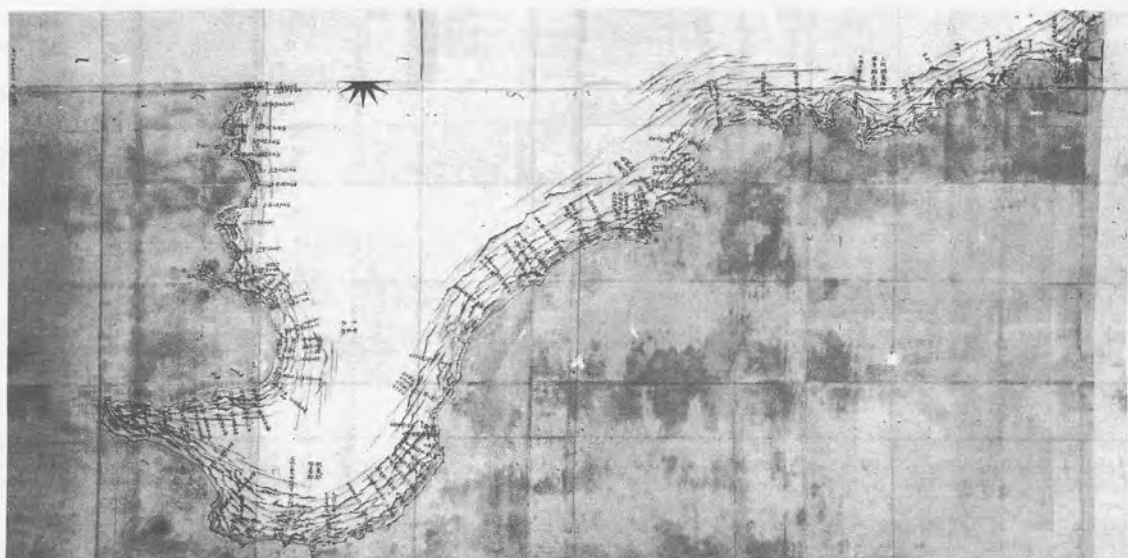


図2 自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第2 (自田浦至片瀬 自大堀至吉浜)
東海道方面の第2図と房総沿岸の第2図が一緒になっている。測線は朱、砂浜を黄色、
山景は緑である。富津岬の先端は測線はなく、砂洲だけが描かれている。(74×160.5 cm)

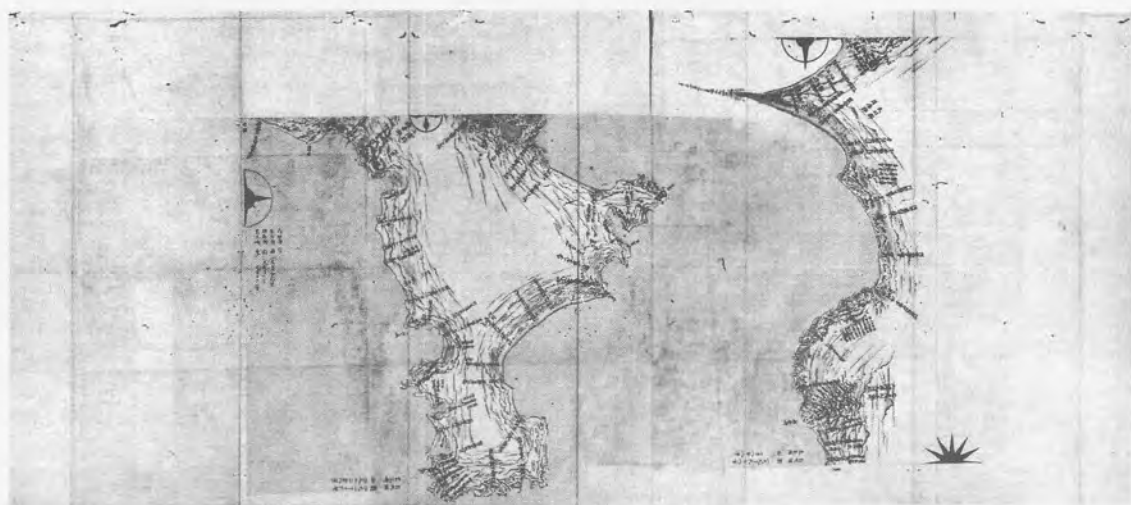


図3 自江戸至奥州沿海図第3 (自吉浜至御宿)
房総半島の先頭部分である。海岸線の砂浜あるいは崖上を測線が走り、沿道の村々の名称、
領主名と海岸から見た風景が描かれている。(87×177.5 cm)

伊能図探求 第十五号

渡辺 一郎

文化元年上呈 伊能大図

表紙写真に掲げた文化元年（1804）提出の「日本東半部沿海地図・大図」の全69枚について逐次紹介したいと思う。原図の所蔵者は伊能忠敬記念館である。

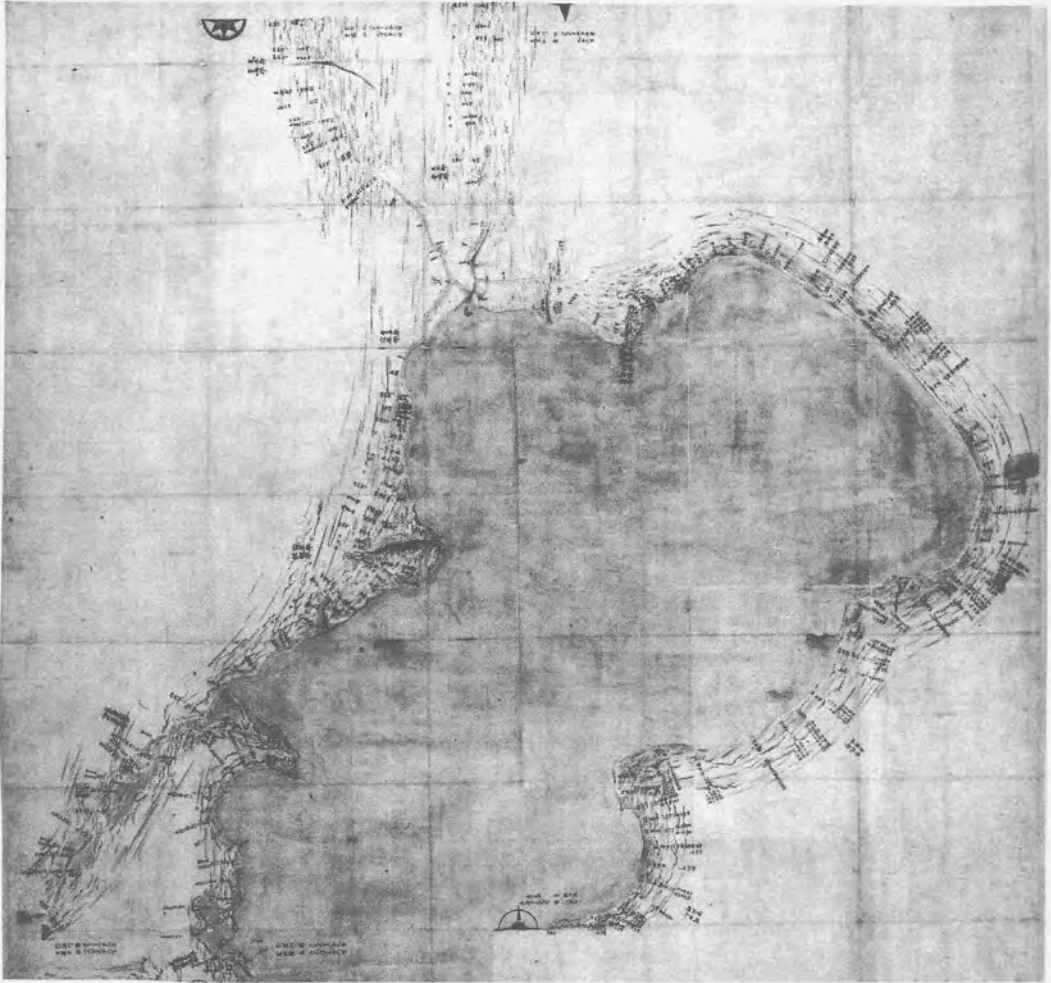


図1 沿海地図 初図（略称）

題僉の名称はつぎのとおりである。

歴尾州赴北国到奥州沿海図第一 自江戸至前沢田浦、奥州沿海図第一 自江戸至大堀、奥州街道図第一 自江戸至草加、

越後街道図第一 自江戸至蕨

各方面別に作成した地図の第1図の江戸部分をまとめて描いた図である。展示頻度が多かったためか退色が激しい。

（縦175×横167cm）

ニュース速報

●十一月十四日、福岡朝日カルチャーセンターで、渡辺一郎代表理事の講演会があり、そのあと九州支部懇親会を開催。詳細は次号。

入会案内

「伊能忠敬研究会」は次のような活動を行っています。

①本会報の発行 当面年四回。

②例会の開催 講演会、発表会、各種史料、伊能図の展示説明会、見学旅行などの例会。

③その他、伊能忠敬に関連するさまざまな事業。

入会方法

住所、氏名、職業、関心分野、電話、ファックス番号を通信欄に記載の上、郵便振替にて年会費六千円を「郵便振替口座 〇〇一五〇・六・〇七二八六一〇 伊能忠敬研究会」あてにご送金下さい。

投稿規定

●会員の投稿を歓迎いたします。原則として一回の掲載は四頁以内とし、越える場合は分載します。原稿多数の場合、採否は編集委員にお任せながります。また、編集委員から一部変更をお願いする場合があります。

●一頁は、二段組三十一字×二六行×二段で一六一二字、三段組二〇字×三〇行×三段で一八〇〇字です。タイトルと写真はこれの中に含めてください。また、提出した原稿は必ず控えをおとり下さい。返却は致しかねます。

●伊能忠敬研究会・ホームページ

URLは <http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

担当 大友正道

*本誌の編集委員は次のとおりです（50音順）

安藤由紀子（元国会図書館憲政資料室）・伊能陽子（伊能家）・香取禮良（前佐原市教育委員会次長）・小島一仁（佐原市史編集委員長）・齋藤仁（学習院女子短大）・佐久間達夫（元伊能記念館館長）・清水靖夫（立教高校教諭・法政大学講師）・芳賀啓（柏書房専務取締役編集長）・渡辺一郎（伊能日本図探究会代表・会社会長）

編集後記

紅葉の候、会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。

九月十二日佐原にて秋季総会、ニッポンを歩こう出立記念の催しがありました。総会に先立ち佐久間さんのご案内で会員は佐原のまちを歩きました。利根川の土手に上がると忠敬が測量した河川敷から吹いてくる風がとても心地よく、なぜか懐かしく感じられました。

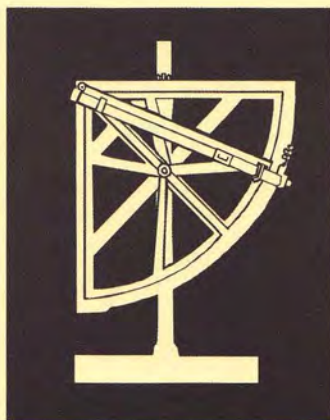
総会後は今も日常の商売が営まれていながら江戸の名残を漂わせている商家のまちをぶらりぶらり、みたらし団子を食べながら路地奥の常夜燈に「かつての道はここでは」と思いを馳せながらめざすは黒切りそば。土間と太い梁が圧巻の「よくら屋」さんでの懇親会。屋台料理と地酒を堪能した帰り道、夜舟に柳が似合う小野川は暗く静けさを増しコオロギの鳴き声がいつまでも耳の奥に残りました。お土産に買った熊手で何をかき集めようかしら？

（岡）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.17 Autumn 1998



ESSAY 1

- A Memory of Mr. INOH Takashi OGURA Yoshihiko 1

TOPICS 1

- The General Meeting of the Society NAKAMURA Chuya 2
The News of *Shibayama Diary* HOTTA Kiichi 4

LOCAL MATERIALS

- The Case of Surveying Kaga Clan KAWASAKI Michiyo 6
The Two Topics of the Herald WATANABE Ichiro 11

TOPICS 2

- Walking Member's Selection SATO Yoshinao 13

MATERIALS

- Family Documents 10
KUWAHARA Takatomo ANDO Yukiko 14
The Wind of Yamagawaminato INOH Yoko 19

ESSAY 2

- Was pacing off a weak point for Mr. INOH? NAGANO Tatsuyo 24

- A LETTER TO THE AUTHOR OUCHI Shigeo 28

- THE SEARCH FOR INOH'S MAPS WATANABE Ichiro 32

- OTHER NEWS 33

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY